

よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信

十号
2007.12

発行：絵金蔵運営委員会
発行日：2007年12月1日
〒781-5310
高知県香南市赤岡町538
Tel.Fax 0887-57-7117
ekingura@mxi.netwave.or.jp
http://www.ekingura.com/

絵金蔵百話 シリーズ 第九話 幼子の忠義

INFORMATION

澤田美枝の町並み粘土細工 新作公開！

赤岡の老舗酒店の奥様であり、赤岡の町づくりワーク
ショップにも十年来関わってこられた澤田美枝さんの前号でもご紹介した
美枝さんの精巧かつ温かい町並みワールド、その新作がこの度、高知県立美術館
で公開されます。

その他気鋭のクリエイターたちの作品が一堂に集う、メイドイン・土佐の「^{パラダイス}竜宮城」。
この機会をぜひ、お見逃しなく！

高知県立竜宮城 — 高知の造形文化展 —

期 間：平成19年12月9日（日）～平成20年2月24日（日）
開催時間：9:00～17:00（入場は16:30まで）
場 所：高知県立美術館 Tel 088-866-8000

トレッドウェイ・インダストリーズ・
ジャパンの巨大恐竜、デハラユキノリ
のフィギュア、土佐模型クラブ&フリー
ダムプラモデルほかユニークな作品
目白押し！！

年末年始 休館日のお知らせ

年末年始の休館日は下記の通りです。
1月は4日より通常開館いたします。

平成19年12月29日（土）～平成20年1月3日（木）

編集後記

先日、赤岡町近辺のご
出身で、現在は県外でお
住まいのお客様が、「子供
の頃は絵金の絵が怖くて
見られなかったけど、絵
金蔵ができた後聞いて、
なんだか見てみたくなっ
て」と遠方よりお越し下
さいました。五十年以上
昔の「怖い」という記憶が、
再び絵金の絵を見るにつ
けに変わったそうです。
小さい頃の強烈な印象
は、時間を経ても残るの
ものなのかもしれません。
真つ暗な展示室で、怖
さに泣き叫ぶ子どもたち。
彼らもいつか、またもう
一度絵金の絵を見てみた
くなる日が来ますように。
そしてその時は新たな魅
力を発見してくれるよう
に。と願っています。

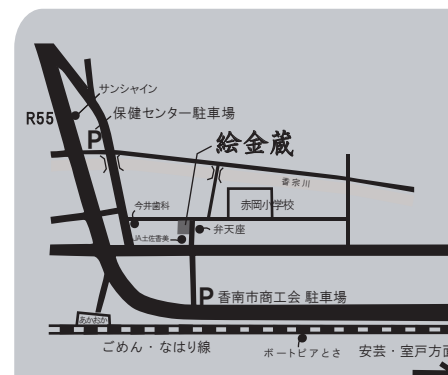
（蔵長・横田 恵）

いつも行くスーパーに
大好きなクルミパンが
あって、でもそのパンを
狙う誰かがもう一人いる
らしく、いつも行ったら
シャット取りに行くこと
になっているけど買えない
時もあった、でも今日は
買えてよかった。なんて
いう話を大正十五年生ま
れのボランティアさんから
聞くと、生きることに、
老いることを改めて考え
させられます。
普通の日々を楽しむこ
と。小さな煩惱を持ち続
けること。しかめっ面で
パソコンを叩きながら八
十歳のおばあちゃんに憧
れるこの頃。来年はもう
少しそんな境地に近づけ
ますように。

（副蔵長・福原僚子）

〔絵金蔵〕

開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時半まで）
観覧料
大人500円、高校生300円
小・中学生150円
（15名以上の団体は各50円引き）
休館日
毎週月曜日
（月曜が祝日の場合は火曜）
12月29日～1月3日



幕末土佐の芝居絵師・金蔵
（通称・絵金）。彼は土佐
各地の祭礼に多くの芝居絵
屏風を残しました。絵金蔵
は、平成17年2月、赤岡の
地に残る23点の芝居絵屏風
を収蔵・保存するために作
られた施設です。

絵金蔵の三つの使命

：年に一度
：絵金の文化を
：守るため
：伝承
：次の世代へ
：伝えるため
：縁結び
：地域を超えて
：世代を超えて

昔赤岡 今赤岡

part I 「製糸・織物」編

江戸時代から商業の町として知られた赤岡。これまで商人たちの活動が注目されがちでしたが、鍛冶や製糸、織物などのものづくりも近年まで行われていました。

歴史の表舞台にはあらわれない普通の人々の小さな営み…。地域の方々の昔語りから、そんな営みを少しづつご紹介いたします。

紡がれる、織物語 —

赤岡では近年まで製糸、織物、染物などの手工業が盛んでした。絵金蔵の北側、弁天通（通称裏町）には藍染工房や染物の取次店などがあり、昭和27、8年まで、手織機で絹織物を織る織子さんがいました。

その娘さんのお話によると、絹糸は弁天通の矢野製糸工場から仕入れ、糸の染めは町内の紺屋に頼んだり、ご自身で染めることもあったそうです。

当時の矢野製糸工場は20人ほどの女性の糸取りさんたちが働いており、神戸方面へも出荷していました。作業は全て、仕入れた繭を煮るところから手作業。繭から一本一本の糸を紡ぎ、染め、織、仕立て、さらに養蚕からだれば途方もない時間と手間をかけて作られた布たち…

時を経て、さまざまな物語を重ねながら、現代に生きています。

織子さんの家にたったひとつ残された手織りの絹の着物。とても軽く、温かな光沢があります。

帯にリメイクされた1910-20年代頃の嫁入り布団。藍染の木綿に寿、高砂などのおめでたい文字が織り込まれています。



矢野製糸工場で糸を紡ぎ、工場主の奥さんによって織られ、京都で染められた着物。親戚のお祝いに贈ったその着物が、数十年後、美しいバックになって戻ってきました。

shop information

待望！？のポチ袋、登場。

もうすぐお正月。お年玉はもちろん、短い手紙やおこづかい、アクセサリーなどの小さなプレゼント入れにも最適！松や梅、楓などの古典的な柄に、絵金の芝居絵の柄もしっかり入ってます。

＜大＞200円 ＜小＞150円
＊各3枚入り

絵金百話

第九話 幼子の忠義

すがわらでんじゅてならいかがみ てらこや
管原伝授手習鑑 寺子屋

＜概要＞

『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』と並ぶ義太夫狂言の三大名作。管原道真が左大臣藤原時平の讒言によって九州大宰府に左遷された事件を中心に、近松門左衛門の『天神記』などの先行作品から影響を受け、さまざまな伝説も取り入れて脚色されています。初演は延享3年(1746) 8月大阪・竹本座にて行われ、以後8ヶ月の続演となる大成功をおさめました。作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲＊。

筆法伝授の勅命を受けた管丞相（道真）は一度は勘当した家臣、武部源蔵を呼び書の奥義を伝授します。その後、丞相は藤原時平の陰謀により養女菊屋姫と時の天皇の弟裔世親王を結びつけ、朝廷に謀反を起こそうとしているとあらぬ疑いをかけられます。遠島を命ぜられた丞相は一子秀才を源蔵夫婦に託し、源蔵夫婦は寺子屋を営みながら秀才をかくまいますが、やがてそのことが時平に知られ、秀才の首を差し出せと迫られます。悩んだ源蔵はその朝入門した子の首を代わりに討って差し出したのでした。検使の松王丸はこれを秀才の首と認めていったんは帰り、その後再び現れ、自分の子を身代りのため入門させたことを告げます。のちに天変が起こり時平一家は雷神に滅ぼされ、秀才は管家を相続することとなります。

本作に登場する松王丸は三つ子の設定ですが、これは延享3年7月に大阪・天満に生まれた三つ子に公儀から大金が与えられ、巷をにぎわせた出来事を取り込んだものといわれています。ストーリーのおもしろさはもちろん、わずか一か月の間にこうしたニュースを作品に組み込む鮮やかさ、さらに、同4年2月に行われた江戸・肥前座での公演の際江戸中の手習師匠に安札を配るといった集客テクニックも三都に管原ブームを呼んだ要因の一つでしょう。

いかめしい検使たちから逃れようと大騒ぎする子供たち、首を討たれたわが子を前にあくまで検使役としてふるまう松王丸、決死の覚悟で首を差し出す源蔵夫婦…闊達な筆さばきで、笑いと緊張を見事に描き分けた絵金の芝居絵をご紹介します。

＊初代竹田出雲は翌延享4年6月に没しましたが、その後も小出雲、並木三好の三人が分担執筆する形が続けられました。『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』など彼らによって作られた作品は今日も人気の名作ぞろいです。



この段の結末はとっても
悲しいニャ…。その前に、
ちよっと一息、笑って笑って！

菅原伝授手習鑑 寺子屋（よだれくり）

いたずらの最中に詮議が
はいまり、顔にべったり
墨をつけたままの長松
（ちよま）

こおもての春藤玄蕃も、
暴れる子どもたちを
ちよっともてあまし気味…



身代わりに子を
預け、泣く泣く
やってゆく松王
丸の妻千代

松王丸「コリヤイ
百姓めら、エ
いざはとぬかさ
ず共、一人宛呼び
出せ、面改めて戻
してくりよ」

ハラハラ
ドキドキ、
武部源蔵夫婦

寺子屋の悪童
あだ名は
“よだれくり”

子どもたちが
心配でならない
いい様たち

赤岡町横町二区所蔵
154.0cm × 172.5cm

ここは武部源蔵夫婦が営む寺子屋。源蔵の留守に子供たちが騒いでいたところ、かくまわれている菅丞相の子、菅秀才を捕えに大勢の部下を引き連れた春藤玄蕃と松王丸がやってきて詮議がはいまります。

逃げ惑う子、泣きわめいて暴れる子、気が気でない親やおじいさんたちも集まり寺子屋は上を下への大騒ぎ…。



絵金の時代

I 歌舞伎芝居の流行

絵金（1812-1876）が生きたのは幕末から明治初年にかけて、日本がかつてない大きな転換期を迎えた時代でした。絵金を生んだ、そんな時代の諸相を様々な角度からたどります。

芝居はご法度！？

江戸時代は幕府や藩によって庶民の生活にさまざまな規制が加えられた時代。全国的に流行していた芝居も天保の改革（1841）により禁ぜられましたが、城下以外の農漁村では神仏に奉納するという名目で地芝居を演じることが黙認されていました。

天保7年（1836）の奥書のある「土佐国風俗記」には「浦々狂言初リメイメイツカレヲ求メ番ノ振替ヲナス。西又東ニユク、舞台浜ニ掛リ、浪声地語りニ和シ、サイトヲ（斎灯）ノ煙リ天ヲ焦シ、幕明キ、拍子木ノ音丁々タリ。（中略）酢屋ノヌレゴト、スキ者涎ヲ流シ、権太ガ切腹、老人涙ヲ含ム。千両ト誉メ、団十郎ト云、口々はヲハヤス。」（『日本庶民生活史料集成』第9巻）と当時の人々の芝居への熱狂ぶりが伝えられています。

土佐の歌舞伎舞台

1994年9月までに確認された県下の常設舞台数は107棟（解体されたものを含む）。その分布は海岸部に多く、現在の香南市に含まれる赤岡、夜須、野市、香我美といった町も特に多い地域の一つに当たります。

107棟の舞台のうち、神社の境内にあるものが93棟、さらにそのなかで、神社の拝殿をそのまま舞台として使用したものが73棟を占めます。宵宮祭りに絵金の屏風絵を飾る赤岡・須留田八幡宮にも、かつては回り舞台をそなえた拝殿がありました。

＜参考：坂本正夫「高知県の農村歌舞伎舞台の概要」『土佐史談』第197号 1995年1月＞

伝播の経路は？

江戸時代、本県を中心部にあたる南国市前の浜や高知市種崎、仁井田からはお舟方に賄賂をつかって大阪に出て芝居修行をして帰る者がいたと伝えられます。

東部の室戸市佐喜浜でも木材などを大阪へ出荷する積船の乗組員たちが歌舞伎を見覚えて帰り演ずるようになったといい、また前の浜や赤岡では金毘羅参りの際、金丸座で芝居を見覚えて帰ってきたとも伝えられています。

回船問屋が栄えた赤岡でも上方との往来は盛んであり、芝居に関する情報も海陸両方から集められたと考えられます。

＜参考：坂本正夫「高知県室戸市の農村舞台 ―歌舞伎舞台を中心として―」『土佐史談』第121号 1968年11月＞



高野の舞台 国指定重要有形民俗文化財
高知県高岡郡東津野町高野・三島神社
明治6年（1873）

■ 囲む捕手たち

「家来衆、源蔵夫婦を取巻召れ」の松王丸の言葉に十手を振り上げ、取り囲む捕手たち。

■ 天道様仏神様憐み給へ。

ニセ首と見破られたら、これまでの苦勞がすべて水の泡となる…。必死の形相で祈る武部源蔵の妻、戸波。

寺子屋と道真

江戸時代、日常生活に必要な読み書き、そろばんなどを子供たちに教えた寺子屋は寛政期（1789～1801）以降三都はもとより、農漁村にも広まっていきます。その教え手は、僧侶のほかや書家、神官、医者、浪人など。

書や学問の神としての道真への信仰が庶民の間に広がったのも江戸時代。伏見では道真をかたどった土人形が作られ、子供の成長や学業成就を祈り、正月や端午の節句に飾られました。

平安時代、怨霊として恐れられた道真の霊は、近世になって子供たちにも身近な天神様となって今日も信仰されています。



■ 討死必至！

捕手に囲まれ、もはや逃げ場もない武部源蔵。後ろ手に鞘をぬき、ニセ物と言われれば切りつけようと固唾を飲んで松王丸をにらみつけています。

■ 幼子の忠義

父母のためという、ただ一途な思いを胸に菅秀才の身代わりとなって首を打たれる小太郎。白装束でにっこり笑って死んでいったと、のちになって父、松王丸にその最期の様子が告げられます。

■ 早く渡せ！

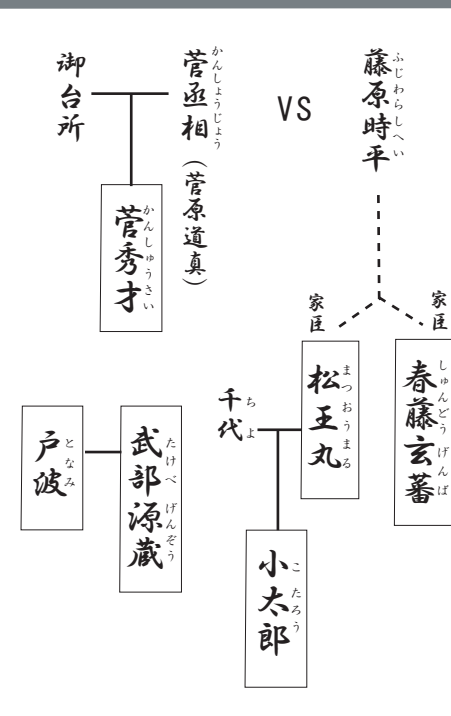
秀才の首を早く渡せと催促しきりの春藤玄蕃。しかし秀才の顔を知るのは松王丸のみ。目をぎょろつかせながら身を乗り出して松王丸の答えを待っています。

■ ムウ、コリヤ紛いなし。

日頃から恩義ある道真と兄弟たちに敵対していることを心苦しく思っていた松王丸。仮病を使い時平に暇乞いをしますが、菅秀才の首を討てば暇をやろうと言われ、自らの子を身代りに差し出すことで道真への恩を報じようとしています。

首を討たれたわが子をためつすがめつ眺め「ムウコリヤ菅秀才の首討たは紛いなし相違なし」と言い、討死覚悟の源蔵夫婦を驚かせます。

寺子屋の段 主要登場人物



すがわらでんじゅてならいかみ 寺子屋 菅原伝授手習鑑

二曲一隻屏風/紙本著色/176.0×161.0cm
赤岡町本町二区所蔵

— あらすじ —

京の片田舎、芹生の里で寺子屋を営み菅丞相の一子菅秀才をかくまう武部源蔵、戸波夫婦。

ある時、源蔵の留守に入塾希望の母子が現れ、母親は子、小太郎をしばらく預けるといって立ち去る。そこへ源蔵が戻り、菅秀才のことが露見し、首を討って差し出せと命ぜられたことを戸波に話す。悩んだ源蔵は新しく来た子の首を秀才の身代わりに討って差し出すことを思いつく。

やがて藤原時平の家臣、春藤玄蕃と松王丸が捕手を連れて現れ、子供たちをひとりひとり調べはじめる。追い詰められた源蔵は検使もろとも討死の覚悟で小太郎の首を討ち、秀才の首といって差し出す。ところが秀才の顔を知っているはずの松王丸が偽物と言わず、秀才の首に相違ないと述べたため、源蔵夫婦と秀才は難を逃れる。

その後、再び松王丸が夫婦のもとを訪れ兄弟のなかで自分のみが時平側にいることに苦しみ、恩義ある丞相のため自らの子を身代りに差し出したことを告白する。

12月の蔵の穴で本物を公開中！

【参考文献】

『日本古典文学大系99 文楽浄瑠璃集』岩波書店 1972年11月
『歌舞伎事典』平凡社 1993年4月
『絵金展 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年
『絵金蔵収蔵品目録』赤岡町 2005年2月
近森敏夫『絵金読本』香南市商工水産課 2006年3月 改訂版
沼野正子『ほんとうはおもしろい歌舞伎 菅原伝授手習鑑』汐文社 2006年11月

＊1 『日本古典文学大系99 文楽浄瑠璃集』岩波書店 1972年11月